

桜蔭俳話会 十月句会(第二八〇回) 於桜蔭会館

平成二十一年十月二十五日

- 4点② 論争のハブ空港や天高し 幸枝
- 3点① 秋閑けて己が余生を計りある 与史
- 3点 見得を切る地芝居歌舞伎水を打つ 幸
- 2点① 灯の入りて盆地の底のちろかな 守
- 石庭に続く茶室や蒿紅葉 幸
- 2点 過去よりの決別蟻蚨飛びにけり 守
- 天高し老いの一回走り去る ヤエ子
- 鴟の敷地にしづかなる水の音 守
- 携帯をパチンと開く青蜜柑 ヤエ子
- 秋の陽を海へ沈めり能登金剛 幸
- 秋の虹メモすべきこと忘しけり 秀一
- 1点① 古書の値の思ひの外や秋の雲 秀一
- 古書街の青果直売無農薬 秀一
- 蟻螂の祈るかたち立ち上がる 守
- 1点 恙なき一日一日や秋桜 幸
- ほろにがきワインの色に秋思かな 文枝
- 名月やライトアップの塔の上 与史
- 新聞の隅ばかり追ふ文化の日 秀一
- 秋うらら幼子の歩み鳩のごと ヤエ子
- 墨の香の残り確かめ秋惜しむ 文枝
- 京古地図そつと開くや後の月 幸枝
- 思ひ出に更けゆく夜長の夫婦かな 溪水
- 野鍛冶の火かき起こしけり花芒 守
- 一湾のビルに囲まれ秋暑し 幸枝
- 草風ちやん付けで呼ぶ人と会ひ 与史
- ※ 背伸びして心乏しき曼珠沙華 幸枝
- 秋霖や間違へられし傘さして 秀一
- 一粒を又一粒と愁思かな 文枝
- もてなしに温泉と共に星月夜 溪水
- 木々の影刻々黒し秋の暮 幸枝

- 金木犀こぼれ朱色に雨の降る ヤエ子
- 秋うらら遠まはりして九十九折 与史
- 起きぬげに朝一杯の秋の水 眞三
- 丹精の小菊盆栽人寄せて 溪水
- 温暖化に金木犀の遅れ咲き 与史
- 入選か立ちて笑むなり秋サロン 眞三
- 煎りぎんなん黄緑となり夫婦る ヤエ子
- 秋の雲茜にそまる遠出かな 文枝
- ハアア一交す子歩む竹の春 眞三

不在投句 瀬戸溪水、